

アカデミックライティングで観察される 学習者の引用技術について

—学術場面で必要とされる引用と一般社会で見られる引用—

坂口昌子（京都外国語大学）
m_sakaguchi@kufs.ac.jp

【要約】

本研究は、アカデミックライティングを教える授業において、キュレーション作業を取り入れ、学習者に文章の組み立てや引用について十分に意識させる授業を試みた結果について分析したものである。パラグラフィティングなどに関しては、ある程度の成果があがったと考えられる結果となったが、十分に配慮して引用技術を指導したつもりでも、授業後にも不適切な引用をした作文はなくならなかった。具体的には、あからさまな剽窃（コピー）は数少ないが、引用箇所を明示させたり、参考文献リストをつけたりすることにおいては、明確な意識付けができなかったのである。その学習者の状況と、現在のインターネット上でよく見られる引用技術とを合わせて考える。

1. はじめに

日本語非母語話者に対してはもちろんのことだが、日本語を母語とする学部1年生に対してのライティング教育もおよそ90%の大学で行われている（文部科学省（2013））。学部1年生は、入学してすぐにレポートという形で文章を書くことを求められるが、それに対する能力が欠けていると考えられるため、このような教育が行われているのである。もちろん、高校までの教育の中で、多くの項目はすでに学習済みだが、「見知っているけれども習得できていない」というのは、今日の、レポートをうまく書けない大学生たちの状態を最もよく言い表すフレーズの1つであろう」（p. 55）と渡辺・島田（2017）が述べているように、教育はされているが、実践で使うことが出来ない状態にある。

さらに、上記の渡辺・島田（2017）は、高校までに教えた比重が少ないもの、教科書でカバーされていないものなどから、次の4つのライティング技術が、大学で教えるべきものだとしている。

- 1) 文章を「組み立てる」技術
- 2) 引用の具体的技術
- 3) 推敲の具体的技術
- 4) 再帰的な文章作成

これらの4つのライティング技術のうち、1)の文章を組み立てる技術と、2)の引用の技術についてはキュレーションの方法を用いて学生の意識付けをすることがよい効果をもたらすのではないかと考え、実施した結果を述べる。

キュレーションを用いた授業概要については3章で、授業後の学習者のアカデミックライティングの状況については4章で述べていく。

本論で述べるキュレーションというのは、次のように説明される。

キュレーション (curation) は本来、「情報などを集め、整理し、新しい視点から価値を加えて、その情報を他者と共有する」といった意味。その動詞形がキュレートで、日本では「キュレートする」といった言い方もする。(中略) 現在では、ウェブページに加えてブログ、SNS、ツイッターなどが普及し、インターネット上の情報がますます増えている。そのため検索した結果から、さらに情報を精査する作業が必要だったりする。そこで、特定のテーマに関心を持った人が、インターネット上から集めた情報を整理してリスト化、それを公開できるサービスが登場した。そして現在は、この作業をキュレーションとっている。その際、情報の取捨選択や並べ方に選者の個性が出るので、キュレーションもひとつの表現と考えられている。(NTT コミュニケーションズ (2017.9 参照))

現実には、ネット上には質のよいキュレーションと質の悪いキュレーションが混在している。よいキュレーションとは、自分なりの視点に立って情報を集め、なおかつ情報源を明らかにしたものである。しかし、現実には存在しているインターネット上のまとめサイトでは出典が明らかではない文章も多く見られる。このことに関して、学習者の作文と比較しながら、5章で詳しく見ていく。

本論では、主に2017年に収集した日本語母語話者のデータを14名分、中国語母語話者のデータを6名分用いて分析する。以下、「学習者」という場合は、本論の授業をとった両者を指し、母語によって区別する必要があるときは、「日本語母語話者」「中国語母語話者」と呼ぶ。

2. 先行研究

本研究に関わる先行研究としては、ライティング教育に関わる研究、引用や盗用の研究、要約に関わる研究などがある。

ライティング教育の必要性について述べられた論文は数多い。成田・大島・中村(2014)は、初年度教育の必要性を述べる論文の中で、日本語母語話者のライティングについて、次のように述べている。「同世代のほぼ半数が大学に進学する状況の中、もはや大学生であっても新聞や雑誌などの既存の文章メディアの読み手であるとは限らず、ましてや論説の中心的な書き手であるとは言えない。」そのため、大学に入学してすぐ当然のようにレポートを書くことを要求されて、学生たちはとまどうのであろう。また、同じように、大島(2009)も「自分の意見を主張するのは好きで得意だが、本などの他者の言葉をうまく引用・要約して利用することは苦手な学習者が多い。」と述べている。意見文に関しては、高校生たちは小論文という入試の一形態の影響で、書きなれている可能性が高いが、複数の資料をもとに情報をまとめていくことについては十分な訓練を受けていない可能性が高い。このことは前述の渡辺・島田(2017)に高校までの「レポート」の書き方の定義や指導法と、大学からのものが異なっていることが次のように述べられている。「高校の国語におけるレポートの位置づけやその意味・性質は、大学におけるそれよりも限定的である。」意見を述べることは意見文・小論文という別のジャンルの書き物で行うことであり、レポートは事実のみを報告し、筆者の意見を述べることは含まれていない位置づけだということである。

また、引用技術や盗用などの問題に関しては、八若(1999)は、母語話者と日本語学習者の両者に読解材料からどのように情報を使用するかという研究を行っている。その結果、母語話者・上級学習者・中級学習者の3群に「引用」が見られず、「独自の説明」が多く、「言いかえ」「ほぼコピー」「コピー」¹が少ないということが報告されている。これは、母語話者にも学習者にも引用についての知識

¹ 「引用」とは、原文のまま、引用符を用いて、読解材料からのものであることを明示しているもの。「コピー」

が不足していることを示していると同時に、「言いかえ」ることによって自分の言葉に直しているのだから、引用のマーカを付ける必要がないと考えた可能性があることも示している。

また、コピーや言い替えには日本語力と関係があると述べる藤村（1997）もある。日本人大学生の場合、本文中の複数の文から要約文の1文を作るが、留学生の場合は原文の1文を圧縮して要約文の1文を作っているというのである。（p. 10）

さらに、吉村（2015）では「日本を含むアジアの国々では、盗用、特に「表現の盗用」については、これまであまり問題視してこなかった」こともあり、「学生たちが外国語学習において借用した表現を用いてきた経験から、他人の文章中の表現の借用がなぜ不正になるのか理解させることは難しい（p. 155）」と述べられている。そして、「盗用は必ずしも道徳心欠如だけにあるのではなく、学生の読み書き能力不足、学生と教員間の価値観の相違、留学生においてはその文化的・教育的背景の相違も盗用の原因であることが明らかにされてきた。（p. 152）」とも述べている。

以上のように、盗用が多く見られる背景には、1. 日本語力（読解力や作文力）の問題 2. アカデミックに慣れている教員と、あまりそのような文章に触れてこなかった学習者間に生じる齟齬の問題 3. 表現の借用に寛容な文化の問題 の3点が存在し、ただ罰するだけでは学習者の態度を改善する効果は弱いと考えられる。

先行研究では、引用の問題点に関しては、日本語非母語話者を調査したものが多いが、本論では、初年度教育のありかたを探る上で、日本語母語話者の状態について考察していくことも目的としている。

3. 調査方法

3. 1 授業の概要

本研究では、2015年からアカデミックジャパニーズのクラスで、キュレーションを取り入れ、文章の組み立ての練習をしている。キュレーションという方法は、次の①～③の3点を満たす必要があるため、レポート作成に必要であるA～Cの3点の訓練になると考えているためである。

表1 キュレーションに必要な技能と、訓練できる技能

キュレーションに必要な3点	訓練できると思われる技能
①原文の内容を理解する必要がある。	A 読解能力を向上させることができる
②自分のことばで場面に合わせて言い換えたりまとめ直したりする必要がある。	B アカデミックな文章、話し言葉、書き言葉、相手に合わせる文章を工夫する力を養成し、理論構成を組み立てなおすことで、構成の盗用を避けることができる。
③出典を明記し、引用の形にする必要がある。	C 引用の技術を身につけることができる。

特に、Cの効果について、有効性があるのではないかと考えている。プレゼンテーション時のスライドに1枚1枚引用元を明記していく方法でキュレーションを行っているため、従来「引用元をはつき

とは、著者や書名の言及なしにそのままの形で使ったもの。「ほぼコピー」は、1、2語同類語に言い換えられたり、統語的な置き換えがされているもの。「言い換え」は、「ほぼコピー」よりも統語・語の変形が多いもの。「独自の説明」とは、読解材料の内容をもとに自分の言葉で述べているものを指す。（pp. 15-16）

りさせる」ことの意識づけが弱かった学生たちにより訓練法となると思われる。そして、キュレーションしたものを口頭でプレゼンテーションさせることで、書き言葉を話し言葉にしたり、他人の意見をまとめて自分のことばに置き換えたりするパラフレーズの訓練にもなるので、従来の方法よりもより引用についての意識を高められると考えている。

15回の授業の中で、前半はパラグラフライティングやクリティカルリーディングを行い、根拠を示しながらまとめた文章を書く練習をした。後半にはキュレーションを取り入れて、パワーポイントを使ったプレゼンテーションを行った後に、小論文を書いた。授業中は、教師からのフィードバックもあるが、ピア評価、グループ評価も取り入れ、自分以外の学習者が書いた文章も積極的に読み、講評する形で授業を行った。

3. 2 キュレーションをする手順について

手順としては、まず、自分がまとめたい事柄について、情報をインターネットや書籍から集める。その際は、自分の意見を補強する事実だけではなく、反論や、自分とは異なる意見も必ず含むように指示した。次いで、それらの情報を自分が組み立てた章立てに沿って、各章ごとに1枚のスライドにまとめ、プレゼンテーション全体では10枚程度のスライドにした。その際には、1枚ごとに必ず引用情報を明記することを義務とした。

一度全員の前でプレゼンテーションをして、お互いに評価した結果を受け、最終的にレポートとして、文章化して提出している。

3. 3 被験者の概要

本論が調査対象としたのは、日本語母語話者の作文が14名分、中国語母語話者の作文が6名分である。収集した時期は2017年の7月である。これらの作文は、日本語母語話者と非母語話者がともに学ぶクラスで収集しており、作文を論文内に使用することに関しては、書いた人物が特定できないことを条件に承諾書を得ている。

日本語母語話者は、学部学生で、1年次生が最も多く9名、2年次生が2名、3年次生が2名、4年次生が1名であった。中国語母語話者は、短期留学生（中国の大学に在籍しており、1年の交換プログラムで来日している。すでに7月の段階で、日本には11ヶ月滞在している）が4名と、学部留学生在が1名、中学時代に渡日した帰国生が1名であった。この2名はともに学部1年次生である。

4. 授業後の文章の状況

4. 1 文章構成について

日本語母語話者に対するライティング教育をした場合、構成を考える・話題をまとめる・接続詞を用いることは意識させやすいことが、坂口（2013）によって示された。本研究でも、キュレーションに関わる授業の前のレポートと後のレポートでは、文章構成に関する部分において大きな変化が見られた。例えば、次の例（1）は、日本語母語話者の1回目のレポートだが、1字下げや改行といった形式的段落も作れておらず、人物描写に関わる文が2つにわかれているなど意味的にも段落を作ることができていない。接続詞も「まず」が使われているにもかかわらず、「次に」も「終わりに」などもない状態だった。

しかし、同じ人物の3回目のレポートである（2）の例では段落ができているのがわかる。形式的

にも1字下げがされているし、接続詞でも段落を作っていることがよくわかる。

(1) この絵は、朝という明るいイメージと死という暗いイメージの対照的な様子を意味している絵だと思います。まず、人物は赤毛で縮れた髪からヨーロッパ系の白人です。薄手の長袖を着用していて、窓を開けていることから季節は春です。空の色の上の方が青く、下の方が黄色いので、日の出の時間帯だと考えました。人物は20代の男性です。(J4-1²)

(2) 世界は今、水不足の危機に直面している。私たちはその事実を受け止めなければならない。初めに地球上に存在する水の割合から始め、水不足におちいった原因やそれから引き起こされるトラブル、改善策について説明する。

まず、地球の70%は水である(中略)・・・

次に、水不足と人口増加の関係について(中略)・・・

では、水不足の原因とは何なのか。<まとめ部分略> (J4-3)

このように、キュレーションに関わる授業をする前のレポートと授業後のレポートを比較したものが次の表2である。すべての学習者が、段落を意識し、意味段落を作ることができていた。

一方で、(3)の例のように、中国語母語話者の方がはじめてから段落を意識して文章を書けていることがわかる。中国語母語話者のうち4名がすでに大学に所属して数年経過した学生であることも関係するかもしれないし、外国語としての日本語を学ぶ内にそのような技術を身につけているとも考えられる。

表2 (意味)段落を構成できている作文の数

	日本語母語話者(14)	中国語母語話者(6)
授業前レポート	2	5
授業後レポート	14	6

(3) 初めてこの絵を見て、なんか静謐な雰囲気を感じました。(全体的な描写が続く)

主人公を見て、(人物描写が続く)・・・

画家の主人公がいる場所は小さくて、暗いと感じます。(場所の描写が続く)・・・

窓の外景色を見て、(外の景色の描写が続く)・・・

この絵全体から見て、二つの部分が分けています。一つの部分は窓の外です。<まとめ> (F4-1)

4.2 引用技術について

アカデミックライティングにおいて、引用として適切かどうかは、次の3つの項目を満たしているかどうかで判断される³。

² Jとあるのは日本語母語話者で、Fとあるのは日本語非母語話者である。その後ろの数字は個人番号を表す。

³ まず、アカデミックな場面、論文やレポートの書き方の教科書類に挙げられている引用の方法を見てみると、次の2点を満たすことが求められる。(二通・佐藤(2000)、石黒・筒井(2009)、三浦他(2006)など)

- A 参考文献リストをつけていること
- B 引用箇所が明示（「 」で示す，引用部分をインデントで示す）されていること
- C 引用箇所と参考文献が結びつけられていること

作文の中で用いられていた引用方法については，次の表3のとおりである。

アカデミックライティングとしての引用が完全に達成されているものとしては，日本語母語話者の作文1例と，中国語母語話者の作文1例のみであった。両作文とも，脚注の形で引用が示されていた。

(4) 厚生労働省のサイトには，「発症前1か月におおむね100時間，または，発症前2か月間ないし6か月間にわたって～（省略）～業務と疾患の発症との関連性が強いとされる」¹とある。 +文章末に参考文献リスト（J2）

(5) 保守派は，トランスジェンダーが男女どちらのトイレでも選択できれば，「トランスジェンダーのふりをした男性が女性トイレに入り込み，女性の安全が脅かされる」と主張する。⁵ +文章末に参考文献リスト（F2）

逆に，参考文献が1つも挙げられていなかった作文が，日本語母語話者で5つも存在していた。

表3 引用の示し方について

	日本語母語話者	中国語母語話者
何ものなし	5	0
Aのみ，またはBのみ	7	3
AおよびB	1	2
AとBとCが満たされている	1	1

それでは，引用が不完全な作文にはどのようなものがあつたのか，次の4.2.1から4.2.2で見よう。

4. 2. 1 学術的には不適切だが，剽窃とは言えない引用

参考文献リストを付けないというのは，引用技術としては不完全であるが，次のように，リストはないが文中に引用したことを明示しているものが日本語母語話者にも中国語母語話者にも1例ずつあつた。

(6) ドライバーは二種免許を持っていなければいけないが，自家用車で営業できるサービスである。だが，地域住民に考慮して現金決済でもよいとしている。（Uberホームページ）（J3）
-参考文献リストなし

- (7) 専門家鈴木優治さんの意見による，死後離婚をした人は婚姻関係終了届を出すことを検討してもよいかもしれない。(F4) -参考文献リストなし

それとは逆に，参考文献リストはあるが，引用箇所が明確にされていないものも見られた。(8)の例は，東洋経済オンラインの記事を参照しているのだが，それは読み手がリンクをたどり原文を探してはじめてわかることである。

原文は，タイトルが「お色気「生中継アイドル」にハマる富豪の行状－拝金主義が蔓延する中国社会的縮図がある」で，ある中国人男性の行動をジャーナリストが報告したもののだが，F3の学習者は，それを「ネット生中継は，拝金主義が蔓延する中国社会的縮図でもあるという意見」と簡単に書き換えている。

- (8) まず，反対意見は主に二つある。一つ目はネット生中継は，拝金主義が蔓延する中国社会的縮図でもあるという意見である。二つ目は・・・+文章末に参考文献リスト (F3)

(9) の例も，参考文献リストに挙げられているサイトには，国連が発表した人口と取水量の関係をグラフにしたものが載せられており，それを独自に文章化したことはわかったが，元々の出典にさかのぼって出所を明示しているわけではなかった。

- (9) 2013年に国連が発表した世界の総人口は72億人である。そして，2050年までに90億人に達すると推測されている。+文章末に参考文献リスト (J4)

4. 2. 2 剽窃とみなされる引用

次の例(10)は，引用であることはわかるが，「世間の意見」という書き方をしており，誰が語ったかが明らかになっていないし，参考文献リストも付けられていないため，原文を探すことは不可能である。

- (10) 次に，世間の意見を見てみると，「日本が日本本位の漁獲枠を希望するのは，ある意味仕方ないことだと思う」などの肯定的なものと，「日本の都合しか考えていない。これでは無理だ」などの否定的なものがあった。 -リスト (J13)

さらにもっとも問題なのは，以下の(11)(13)のような例であろう。参考文献リストもあり，一見問題がないかのように思えるが，実際に原文である(12)(14)を見てみると，引用のマークがない部分も，表現のほとんどがそのサイトからとられていることがわかる。このような例が日本語母語話者に1例，中国語母語話者に1例見られた。

- (11) お金を儲けるためだけに子犬を乱繁殖する業者だ。また，その時々の人気の犬種を取り扱い，その犬種を理解しないまま，単に「売れるから」という理由で，無理な繁殖を行う。そ

して、母犬を、子犬を出産するためだけの「道具」として扱う。

反対にブリーダーは愛犬家で、扱う犬種に魅了され、その犬種を心より愛している。

+文章末にリストあり (J9)

(12) 【原文】 お金儲けの為に子犬を乱繁殖する業者のことです。その時々の人気の犬種を取り扱い、その犬種を理解しないまま、利益を得るための商品として、単に『売れるから』という目的のみで無理な繁殖を行い、子犬を出産する為だけの『道具』として扱います。(中略)

ブリーダーは愛犬家であり、その犬種に魅了され、その犬種を心より愛し、世間にその犬種のよさを知ってもらいたいと、犬質のよい犬を産み出すべく長年、同じ犬種を繁殖し続け (<https://petcube.jp/column/pupymill.html>)

(13) 近年、ニュースなどでよく耳にするようになった「女性の社会進出」問題。首相官邸から発表されたアベノミクス3本目の矢「成長戦略」の中で、「女性が輝く日本」と題して女性の社会進出が重要課題の一つに挙げられた。+脚注として参考文献あり (F5)

(14) 【原文】 近年、ニュースなどでよく耳にするようになった「女性の社会進出」の問題。現代社会におけるこの問題について考える前に・・・ (<https://careerpark.jp/14682> キャリアパーク)

首相官邸から発表されたアベノミクス3本目の矢「成長戦略」の中で、「女性が輝く日本」と題して、女性の社会進出が重要課題の一つに挙げられました。 (<http://www.u-can.co.jp/topics/research/2013-08/>生涯学習のユーキャン)

2015年に留学生の日本語のクラスで実施した時も、このようなつぎはぎの例はクラスの4分の1ほどの割合で見られた。そのときは偶然か日本語レベルがN2程度の中国語母語話者に偏っており、韓国語母語話者には見られない現象だったが、今回の調査で日本語母語話者でも同じような方法でレポートを作成する場合があることが分かった。

5. まとめ記事にみられる引用の方法について

ここでは、学習者たちがよく目にするであろう、インターネット上のまとめ記事について、その引用の実態について述べたい。以下の①～⑤の5つの日本経済新聞の電子版サイトに掲載された、時事問題などのまとめ記事を取り上げ、その中で用いられている引用について整理する。買い物のための商品をまとめたようなものではなく、ある話題について述べている記事で、文章を書く職業の人たちが書いているまとめ記事である。()内は紹介されていた文章にあった職業名である。

①田中 歩 (不動産コンサルタント)「家を買うなら まず考えたい3つのこと」

②久米泰介 (翻訳家, 男性問題研究者)「女だから得すること, 男だから損すること ジェンダーと男性差別」

③伊藤和弘 (フリーランスライター)「人間は何歳まで生きられる? 寿命決める遺伝子とは」

④河合薫（タレント，気象予報士，健康社会学者⁴）「育休宣言議員のスキャンダル会見を通じて，私たちが考えるべきこと」

⑤田村 正之（日本経済新聞社 紙面解説委員兼編集委員）「最強の投資優遇税制で「じぶん年金」づくり」

これらの5つの記事で用いられていた引用文は，37文あった。それらは，大きく次の3つの種類に分けることができる。

- a 人名を入れる。
- b 機関名・組織名を入れる。
- c 不特定の人物（人物集団）を入れる。

引用の種類の内訳や，例，使用数などについては，下の表4にまとめた。

表4 まとめ記事の引用の種類と数

種類	例	数
a 人名	1) 「総合的に見てメリットは生保の個人年金やNISAより個人型DCが大きい」(税理士の柴原一氏) 2) 心理学者のヘレン・スミスが書いた『Men On Strike』(結婚ストライキをする男たち)という本が2013年にベストセラーになりました。	30
b 機関名	3) 国交省によると，首都圏における賃貸住宅の空き家率は，13年時点で既に18.5%に達しています。 4) 米国の国立老化研究所の研究によると，摂取カロリーを20%減らしたサルは生活習慣病になるリスクは減ったものの，肝心の寿命には差が見られなかったのだ。	3
c 不特定	5) かなりデリケートな問題なので，一概には言えないのだが， <u>現場の人たちから</u> 次のような意見を聞くことが多い。 6) <u>統計データによると</u> アメリカでも日本でも，1920年時点の男女の平均寿命の差は1歳ほどにすぎなかったのです。	4

種類としては，aの人名を文の中に入れるものが最も多かった。ただし，参考文献リストは⑤以外はない⁵。そのため，元の文献にさかのぼって検証することは難しく，もし学術的な場面で用いるとすれば，不完全な引用だと考えられる。これは，bも同様で，発表している機関名は書かれているものの，どのようなデータで，どこを見れば原典が見られるのかということについては明らかにされていない。このような引用は，前述した，学習者の(6)(7)の例に似ている。

⁴ 河合氏に関しては，職業が明確に記載されていなかったため，ウィキペディアの記事を参照した。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B2%B3%E5%90%88%E8%96%AB> 2016年8月閲覧)

⁵ グラフなどについては，出典が文中に埋め込まれているが，リストはない。

さらに問題なのは、出現数は少ないものの、cの「不特定」と分類したものである。これらは、一見情報を開示しているように見えるが、実際には誰が言っているのかを判別することは難しく、引用されたものとは言いにくい。意図的に情報を操作することさえできる。このような引用は、学習者の(8)(9)(10)のような例に似ている。

このように、前述の①から⑤のまとめ記事の中で、二通・佐藤(2000)などが挙げる引用条件の2点を満たすものは、⑤だけだった。文筆業に携わる著者たちでさえ、このような状態であるので、記名のない記事に表現の盗用、類似などが存在する状態は当たり前だと思ふべきなのかもしれない。

6. まとめ

以上のように、文章構成とは異なり、学術的な引用の技術は十分に授業で伝えたはずでも、なかなか身につけにくいことがわかった。特に、一般社会で上記のようなまとめ記事を日常目にして学習者は、レポートや論文を書くときに、引用の方法を変えることはなかなか難しいのではないかと考える。

アカデミックな場面のみならず、一般社会に出たときにも、情報過多の社会で、流言飛語に踊らされることのないよう、しっかりと裏付けのある文章を読み、考えることを教えていくのも、これから先の教育の中でより必要になってくることではないだろうか。そういう意味では、第一言語の教育の中でしっかりと経験を積ませていく必要がある項目なのではないだろうか。

キュレーションを使った授業は、成功したとはいえない結果となってしまったが、学習者の事後アンケートで、「授業後インターネットの記事を読むときに最も気にするようになったこと」を問うたときに、「根拠・出典」を気にするようになったと答えた学習者が最も多かった(7名/有効回答13名)ことは、まったく無意味だったわけではないことを示唆してはならないだろうか。

今後、何が実践を難しくしているのかということについてさらに追求して行きたいと考えている。それと同時に、人数的にまだまだ統計的な考察ができるほどではないため、さらに人数を増やして傾向をとらえていきたいと思う。

参考文献

- 石黒圭・筒井千絵(2009)『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 石井怜子(2015)「適切な引用のために必要な読解とは?—論説文の読解を中心に—」『第二言語としての日本語の習得研究』第18号 pp.120-134 第二言語習得研究会
- 大島弥生(2009)「ブックトークにみる引用と要約の難しさ」『日本語表現能力を育む授業のアイデア』ひつじ書房
- 勝見明(2011)『石ころをダイヤに変える「キュレーションの力」』潮出版社
- 鎌田美千子(2015)「第二言語としての日本語によるパラフレーズの諸相—ライティングにおける引用を中心に—」『第二言語としての日本語の習得研究』第18号 pp.135-149 第二言語習得研究会
- 鎌田美千子(2015)『日本語教育学の新潮流10 第二言語によるパラフレーズと日本語教育』宇都宮大学国際学部 国際学叢書第6巻 ココ出版
- 坂口昌子(2013)「日本語母語話者に対する日本語教育—話すことに関する教育効果—」『日本語プロフィシエンシー研究』創刊号 pp.84-103 日本語プロフィシエンシー研究会 凡人社
- 成田英夫・大島弥生・中村博幸(2014)『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか』ひつじ書房

二通信子・佐藤不二子 (2000) 『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

八若壽美子 (2001) 「韓国人日本語学習者の作文における読解材料からの情報使用- 読解能力との関連から-」『世界の日本語教育』第 11 号 pp. 103-114 国際交流基金 日本語国際センター

藤村知子 (1997) 「要約文作成における中級日本語学習者のパラフレーズの問題点」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』24 pp. 1-21

三浦香苗他 (2006) 『最初的一步から始める日本語学習者と日本人学生のための アカデミックプレゼンテーション入門』 ひつじ書房

安谷元伸・菊谷愛 (2013) 「中学校 1 年生からキュレーションの力を育成する情報教育の実践の報告」『パイディア 滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第 21 巻 pp. 31-37

吉村富美子 (2015) 「盗用を避けることの難しさと指導」『第二言語としての日本語の習得研究』第 18 号 pp. 150-164 第二言語習得研究会

渡辺哲司・島田康行 (2017) 『ライティングの拡大接続—高校・大学で「書くこと」を教える人たちに』 ひつじ書房

NTT コミュニケーションズ用語辞典

<file:///C:/Users/Masako/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/Y7K59KSZ/1341433_01.pdf>

(2017 年 9 月 10 日)

文部科学省高等教育局「大学における教育内容等の改革状況等について」

<http://www.nttpc.co.jp/yougo/%E3%82%AD%E3%83%A5%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%83%88.html> (2017 年 9 月 10 日)

【資料】

田中歩「家を買うなら まず考えたい3つのこと」日経スタイル

<http://style.nikkei.com/article/DGXMZO97145780Q6A210C1000000> (2016 年 2 月 27 日)

久米泰介「女だから得すること, 男だから損すること ジェンダーと男性差別」日経スタイル

<http://style.nikkei.com/article/DGXMZO97258250T10C16A2000000> (2016 年 2 月 27 日)

小林武彦「人間は何歳まで生きられる? 寿命決める遺伝子とは」日経スタイル 2 月 15 日掲載

<http://style.nikkei.com/article/DGXMZO97099530Z00C16A2000000> (2016 年 2 月 27 日)

河合薫「育休宣言議員のスキヤンダル会見を通じて, 私たちが考えるべきこと」日経ウーマンオンライン

<http://wol.nikkeibp.co.jp/atcl/column/15/011900048/021400002/?P=1&n_ciD=nbpwol_else> (2016 年 2 月 27 日)

田村 正之「最強の投資優遇税制で「じぶん年金」づくり」日経スタイル

<http://style.nikkei.com/article/DGXMZO97327200W6A210C1000000?channel=DF280120166583&style=1>

(2016 年 2 月 27 日)

付記: 本研究は日本学術振興会による挑戦的萌芽研究「高大連携におけるコミュニケーション教育の研究」(平成 27 年~29 年度, 研究代表者: 坂口昌子, 課題番号: 15K12902) の助成を受けた研究成果の一部です。